

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業展開および評価方法について

1 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業展開

1・1 工夫

1・1・1 ICT 機器を用いた授業展開

ICT などを活用することで、教師が生徒一人ひとりのノートを見て理解度を図らずとも、全体を把握することができた。その結果、理解度が低い生徒に時間を割くことができ、結果的にクラス全体として深い学びにつながったと考える。

下記に使用した ICT 機器及びシステムなどを紹介する。

1) manaba

アンケート及びレポート機能など、提出物のチェック及び小テストなどの自動採点することができる。

授業内では理解度を図るために使用した。使用することにより、「個々の理解度の確認」を行うことができる。その結果、理解度の低い生徒を重点的に教えることができる。また、解説にあまり時間を割けない場合は、集計データを確認したうえで、正答数の割合が低い部分のみを解説することとした。(図-1)



一人ではなくチームで学べる時間を創出した。



図-4 グループワークの様子

1・2 課題

1・2・1 ICT 活用について

ICT 活用の授業における問題点は下記のとおりである。

1) 人為的問題

- ・タブレットを忘れる (充電していない)
- ・更新プログラムが作動し使用できない
- ・ログインパスワードを忘れる

2) 環境的問題

- ・回線が込み合っているためか、フリーズしたタブレットを操作できない (特に MetaMoji 使用時)

3) 情報端末の利用における問題

- ・特に1年次はタブレットに慣れておらず、基本操作からの説明になるため、授業時間が削られる (2学期以降は円滑となった)

1・2・2 グループワークの実践について

グループワーク実践における問題点は下記のとおりである。

- ・通常授業よりも時間がかかる
- ・個々の理解度を図ることは容易ではない

1・2・3 今後の授業について

ICT 活用やグループワークの実践により、生徒が「主体的・対話的で深い学び」に繋がるよう工夫を凝らしてきた。問題点は多いものの一つひとつ丁寧に、授業を実践することで改善していくと考える。

ICT を用いた授業展開では、タブレットが授業開始と同時に使用できないと、授業時間の損失に直結し、生徒の学ぶ時間を奪いかねない。そのため、日頃から授業を万全に受けられる体制になるよう、声掛けを行う必要があると考え

る。

グループワークについては、時間はかかるものの生徒の主体的な学習を促すためにも必要不可欠である。授業時間に支障をきたさない範囲で、今後もグループワークを展開していく。

それぞれの工夫点において、利点と欠点が存在している。しかし、ICT の活用であれば、時間短縮が可能になり、その余裕ができた時間で主体的な学びを実践する。また、グループワークで理解度を把握しづらいのであれば、ICT を活用するなど、双方を補い合うような授業計画を組み込むことができれば、現状よりも効率的で、我々が目指す授業実践を遂行することができる。と考える。

2 評価及び評定

2・1・1 評価の結果を評定に落としこむ方法

工業情報数理では3観点の割合を以下のとおりとした。

- 知識・技術 35%
- 思考・判断・表現 30%
- 主体的に学習に取り組む態度 35%

2・1・2 評価方法

1) 知識・技術について

定期考査及び課題考査の点数

2) 思考・判断・表現について

定期考査の点数

3) 主体的に学習に取り組む態度

小テストの点数及び提出物 (ノート・ワーク) 授業態度

2・1・2 評価から評定変換方法

3観点については下図のとおりとした。

対応する評定	観点別学習状況評価
5	AAA AAB
4	AAA AAB ABB
3	ABB BBB
2	BBB
1	Cが一つでもついたら

図-5 観点別評価方法

※A: 70%以上 B: 20~69% C: 20%未満

最終評定については下記のとおりとした。(全体割合からの評価)

5 : 90%以上

4 : 70～89%

3 : 50～69%

2 : 50%未満

1 : テスト未受験・定期考査にて再試験対象となった場合

2・2 評価における課題及び考察

3観点の内「知識・技術」、「思考・判断・表現」部分は定期考査や課題テストの点数で評価をした。この2つの観点については授業毎の評価ができていない。今回ループリックなど評価基準を細かく規定することができず、どのように決めていくかなど、担当者間において擦り合わせすることができなかった。そのため、上記の2観点については、考査の点数のみの評価となってしまう。

今後は授業中に評価できるポイントを明確にするために、担当者同士で協議する時間を確実に設ける。また、リアルタイムで評価することは現実的に難いため、生徒が作成した後のデータなどを評価する形式をとる。その結果、適切な評価をすることができるのではと考える。